

目
次

牛うしと刀かたな…………… 11

狐きつねの四天王…………… 33

真夜中まよなかの舞台…………… 57

ぬけ穴あなの首…………… 73

お猿さるの自害…………… 99



帰って来た男のはなし…………… 113

わるだくみ…………… 163

あとかぎ…………… 211

古典の「おもしろみ」…………… 町田康…………… 217

カバー画・さし絵 山崎英介







ぬけ穴の首

西鶴さいかくの諸国しよこくばなし

牛^{うし}

と

刀^{かたな}



いやもう、欲よくに目がくらむと、兄弟なな仲でもたちまちいさかいがはじまるといったことがないわけではない。

信濃しなのの国（いまの長野県）の浅間あさまのふもとに、松田藤五郎という大百姓おおびやくしやうがいた。今年も八十八歳、これだけ長生きすれば、この世になんの思い残すこともないのだが、ただ気がかりなのは、藤六、藤七という二人の息子のことで、いよいよ大往生だいおうじやうが近づいたとき、枕まくらもとに二人の息子を呼んで、

「どうぞやらわしにも仏ほとけの国からお迎えむかえがきたらしい。こればかりはいやだといつても、断れるわけのものではないし、今日、明日のうちにご先祖さまのいるところに出かけようと思うが、そのあとの財産は、釜かまの下かまの灰までも、仲良く二つに分けて取るがよい」
そういうとおやじさんはしばらく黙だまっていたが、やがて枕まくらもとにおいてあった刀のほうに目をやると、

「さて、この刀は、思いがけなくわしの命を助けてくれて、おかげで今日まで長生きできたが、それ以来わが家の宝物になっているものだ。よいか、よくよくだいせつにして、たとえ牛は売るようなことがあっても、けっして手放してはならないぞ」と、いった。

見たところ、どこと違って変わったところのない、それどころか、そこらにいくらでもころがついていそうなその刀に、どんな神秘的な力がひそんでいるのだろうか。藤六も藤七も不思議でならなかった。しかし、百姓にとつて、牛は畠を耕すためにはなくてはならないものである。その牛を売らねばならないような破目になっても、この刀ばかりは手放してはならないというのだから、外見の造りは貧弱でも、中身はよほどの名刀にちがいない。そう思つて藤六はいった。

「お言いつけ通り、家の宝物としてたいせつにいたしますから、どうぞご安心下さい」
藤七もいった。

「必ず必ず、子々孫々までたいせつにいたします」

おやじさんは、うなずくと目を閉じた。それから、もうふたたび目をあけなかった。

親類の者や村の人たちが大勢集まってきた。

「八十八まで長生きしての大往生だから、まあまあ目出たいことだ」という人もいた。さすがに、藤六と藤七は目を赤くしていた。八十をすぎた老母は、まだ達者だったが、耳は遠くなっていた。そうして、耳の遠いのをよいことにして、一人で隠居屋に引きこもっていた。「どうせわたしも、すぐあとから追っかけてゆくことになるのだから」といわんばかりのようすで、いつもと変わらず、子供たちの野良着を繕っていた。

葬式は盛大だった。墓から帰ってから、みんな食べたし飲みながら、藤五郎の思い出話をしていた。そのうちだれかが、「藤六さんも藤七さんも、たくさんな財産を遺してもらって、仕合せなお人たちだ」といった。「ほんとにねえ」と、ほかの人たちもうらやましそうにいつて、ため息をついた。それを聞いていた藤六と藤七は、神妙な顔つきをしていった。

「ありがたいことです。何もかも、おやじとおふくろのおかげです」

ところが、おやじさんが死んでまだ七日もたたないうちだった。藤六と藤七は、もう遺産の分配をめぐってけんかをしはじめたのである。

釜かまの下の灰まで二つに分けるといわれたのだが、いざ実際に分けるとなると、なかなか公平にはいかない。お金だけなら簡単だが、家屋敷いえやしきや畠はたけや山や牛や、いろいろあつて、どう分ければ公平になるのかもつかしいから、少しでも自分の取り分をよくしようと、毎日、朝から晩ばんまで、二人は言い争っている。恥はじも外聞がいぶんもあつたものではない。あんまりみつともないので、親類の年寄りたちが注意しても、一向に耳をかそうとはしない。

それでも十日ほど言い争つたあげく、なんとか話がついたらしく、親類の者たちもほつとしたが、それも束の間つか、今度は例の刀をめぐつて、前よりいっそう深刻しんこくに口論くわんしだした。親類の者たちには、こんな二束三文にそくさんもんのような刀のことで、なんでそんなに必死になるのか、さつぱりわけがわからない。藤六に聞いてもよくわからない。藤七に聞いてもよくわからない。どうやら本人たちにもよくはわかっていないらしいのだから仕方がない。仕方がないけれども、ほうつておくこともできないので、親類中で一番の年寄りがいった。

「なんといつても惣領そうりょうだから、この一腰ひとししは藤六に渡してやったらどうか」

しかし、弟の藤七は、絶対に「うん」とはいわない。兄は兄で、なにがなんでも自分のものにしようとする。みんなもう仲裁ちゆうさいのしようもなくなつて、そのまま何日も日がすぎた

が、ある日、思いあまつたように、兄の藤六がいった。

「二つに分けたこの家の財産を、全部、釜かまの下の灰まで、藤七にやろう。おれはいつさいの権利を捨てる。その代わりに、この刀はこっちにもらおう」

こうはいったものの、藤六はいかにもくやしく、残念でならないといった顔つきである。だがここが思案しあんのしどころである。刀には代えられない。この刀一本から、どんな財産が生まれるかもしれないのだ。

親類の者たちは考えた。「藤六のこの申し入れをけつたら、もう話し合いは完全に決裂けつれつするだろう」。そこで、一番の年寄りが、藤七をなだめて、この交換条件を受けさせることにした。藤七は、まだ刀に未練みれんがあった。しかし、藤七もここが思案しあんのしどころだと思つた。家屋敷いえやしきも畠はたけも山も牛も、刀のほかはいっさいがっさい自分のものになるのだし、それに弟だから、このへんで手をうつても仕方がないと思つた。

翌日、旅仕度たびじたくをした藤六は、一本の刀を大事そうに下げて、門の外に立っていた。藤六には、もう住む家がなかつた。で、ちょっと心細くなつたがすぐ気を取り直した。こんな田舎いなかで泥んどろこになつて牛を追っているよりは、もっともつとすばらしい未来を、この一本



の刀が約束してくれているではないか。藤六はそつと刀をなでてみた。門にとまっていた烏からすが「カー」と鳴いた。藤六はそのほうをふり返つて、につこり笑つた。そうして、意気ようようと歩きだした。目あては都みやこである。

都みやこまでの道のりは遠かつた。藤六には、よけい遠く感じられた。それでも疲つかれなぞは感じなかつた。楽しい旅だつた。ただ、心配なのは、途中で泥棒どろぼうに刀を盗まれはしないかということだつた。「あまり大事そつに持っている、かえつて目をつけられるかもしれないないぞ」と、そう思うのだが、もともと、刀なぞ持つたことがないのだから、つい大事そつにかかえてしまう。なんだかおかしなかつこうで歩いているらしいことは、自分でもよくわかる。侍さむらいのようにはいかない。「しかし」と、通りすがりの侍さむらいの腰に差した刀を見ながら、藤六は思った。「あんな侍さむらいの刀よりも、おれの刀のほうがはるかにりっぱな刀なのだ。百姓ひやくしやうが侍さむらいよりもりっぱな刀を持つて歩いている。しかも、それをだれも知らない」。藤六は、この皮肉なめぐり合わせが愉快ゆかいだつた。楽しくてならなかつた。

都みやこに着いた藤六は、最初に見つけた宿屋にはいった。もうすっかり日が暮れていたので泊まることにした。つぎの日、藤六は都見物みやこけんぶつに出かけた。刀の目利めきりをする家をさが